

Q 35 不育症はどのような検査によってわかるのでしょうか

A 不育症の検査には、主に子宮形態検査、抗リン脂質抗体検査、夫婦染色体検査、内分泌検査があります。

子宮形態検査

不育症の方では、一般女性よりも先天性の子宮形態異常が多くみられ、流産率とも関係があることがわかっています。子宮の形に異常がないか、以下の方法で調べます。

	検査	説明
一次検査	経膣3D超音波検査	膣から棒状の機械(プローブ)を入れて、子宮の状態を調べます。立体画像で確認できる3D検査は、診断精度が高く、最も推奨されている検査です。
	ソノヒステログラフィー	子宮内に生理食塩水を注入し、子宮腔を広げて子宮内を観察する超音波検査です
	子宮卵管造影検査	子宮の入口に挿入した細い管から造影剤を注入し、子宮内の形や卵管の通りを確認する検査です
二次検査 (一次検査で子宮形態異常が疑われる場合に行う)	MRI検査	筒状の機械の中に入り、磁気と電波で体内の状態を調べます。子宮の形を詳細に調べるのに有効です。
	子宮鏡検査	子宮専用の内視鏡(カメラ)を使い、子宮腔内を目視で確認します。粘膜下子宮筋腫※が疑われる場合にも行います。

※粘膜下子宮筋腫:子宮の内側(子宮内膜の直下)にできる良性の腫瘍

抗リン脂質抗体検査

「抗リン脂質抗体」とは、細胞膜を構成する成分の一つであるリン脂質に反応する自己抗体のことで、血液が固まりやすくなる自己免疫疾患の原因となります。次の2点があると、「抗リン脂質抗体症候群」と診断されます。

- 血栓症または妊娠に伴う合併症がある
- 抗リン脂質抗体^{*}の検査が、1 2週間以上の間隔をあけて、繰り返して陽性である

※抗 β 2GPI抗体、 β 2GPI依存性抗カルジオリピン抗体、抗カルジオリピン抗体IgG、抗カルジオリピン抗体IgM、ループスアンチコアグラントなど。

夫婦染色体検査(Gバンド法)

夫婦それぞれの染色体の構造に異常があるかを調べる検査です。検査にあたっては十分なカウンセリングを受け、検査のメリット・デメリットを十分に検討したうえで、検査を受けるかを判断することが大切です。

内分泌検査

甲状腺機能異常や甲状腺自己抗体があると、流産・早産や妊娠合併症が起こりやすいことがわかっています。

甲状腺刺激ホルモン(TSH)、甲状腺ホルモン(fT4)というホルモンの分泌量を調べる「甲状腺機能検査」、抗甲状腺ペルオキシダーゼ抗体(抗TPO抗体)を調べる「甲状腺自己抗体検査」を行います。

絨毛染色体検査

流産時に行う検査です。胎児の染色体異常は流産の60~80%を占めることから有用性が高いと考えられています。保険適用外ですが(2022年2月現在)、2021年4月に先進医療として承認され、実施が可能になっています。絨毛染色体検査は、厚生労働省に届出をして認可された医療機関において受けることができ、一回5万円を上限に助成が受けられます。